集落の話の聴き手だより

第17号
2025.02

今月は… 下畑

・東側に流れる千曲川は
　年中子どもたちの遊び場だった
・下畑城は武田信玄が
　見張りを置いた山城
・鎮守の諏訪神社は
　祭りで出店がにぎわった

語り手
小宮山　則男さん
木内　　忠造さん
八巻　　清人さん

武田信玄が見張りを置いたという山城跡が見下ろす、下畑。国道１４１号沿いには、かつて火山であった八ヶ岳から流れ出た溶岩が固まってできた巨石、通称「岩の下」が鎮座しています。そんな地質的にも歴史的にも興味深い集落での子どもの頃のお話を伺いました。

馬から牛そして機械へ

「昔は、親に使われて、上級生にも使われたな。」
　則男さんの家には馬がいて、田んぼの鼻どり（※代掻き時、馬の通る道を竹竿で誘導すること）をよく手伝っていました。どこを歩いたかわからなくなって、親に大きな声でよく怒られたと話します。
「おれらは、丁度、馬から牛、機械になる時代の境だった頃の世代だった。」と忠造さん。
　時代が進み馬から牛になり、乳搾りが大変でした。「腕がパンパンになった。」と清人さん。「よく牛に蹴り飛ばされたな。そんな経験のある人は、もうみんな死んじゃった。」と則男さん。

国道１４１号沿いからみえる岩の下

旧八千穂村で唯一残る、獅子舞の伝統

　下畑には旧八千穂村で唯一、獅子舞を行う伝統が今も残っています。昔は正月に子どもたちだけで各家を回りましたが、現在は子どもの人数が減ってしまったため公民館の庭で大人の歌の応援も得て新年祝賀式で行なっています。かつて子どもが大勢いた頃の様子が村誌に書かれています。
　“牡・牝の獅子２頭が玄関に入り、この時、「春の初めの、赤獅子が舞い込んだり、舞い込んだり、悪魔払い」と唱える。獅子は、まず家の中を右回りに１回まわる。２回目に回る時、その家の人々の頭を大口で軽くかむ。”
（八千穂村誌　民俗編より）

世代の違う３人に集まっていただきました。
左から忠造さん（８７）則男さん（９１）清人さん（７４）

　大勢の歌い手が太鼓の囃子に合わせて「門に　それ松竹　や～れ締めの春だとな　それ～でそれ獅子舞えば御家内も　御繁昌（ごはんじょう）とな」と獅子が舞い終わるまで繰り返し歌ったと清人さんが教えてくれました。
　昭和５８年には、下畑出身の小宮山幸男さんによって獅子頭、太鼓、鐘など一式が寄付されました。小宮山さんの獅子舞を続けてほしい想いを引き継いで、今も大事に使い続けています。
　今は行われていませんが、かつては、どんどん焼きも子どもたちで仕切っていました。どんどん焼きのやぐらの下の空間に部屋を作って夜まで遊んだこともあったそうです。
「隣の区のどんどん焼きの山を転がし（崩し）に行ったこともある。よく学校で怒られた。」とのことでした。

昭和６２年頃村祭りで下畑児童会が披露した

千曲川で１年中遊んでいた

　６月頃になると、蛍が川べりや田んぼのそこらじゅうに舞い、家で作った庭ぼうきを振ればいくらでも獲れました。
「昔は、（千曲川は）泉のように水がたんまりとあって流れていたから、いかだを組んで漕いで遊んだ。平らで静かな流れだった。」と忠造さん。深い所では、２ｍ以上あったそうです。そこにかかる下畑橋は木で出来ていて、よく流される橋でした。清人さんは、ある上級生が橋の上からふんどし一丁で飛び込んでいたのを、よく覚えていると笑います。
　また当時は、おおきなウグイやカジカがたくさん獲れました。
「カジカの卵が岩の下にびっしりついていた。赤黄色の卵で鮭の半分くらいの大きさだったな。それを汁ものにして、食べていた。」ほとんど毎日川で魚を獲り、塩焼きにして食べました。
　９月頃は、田んぼの水を引き上げ、放していた鮒を引き上げて煮つけて食べました。正月には、池で飼っていた鯉を鯉こくや保存食にして食べました。魚は、当時の人にとって大切なたんぱく源でした。卵を産まなくなった鶏か兎の肉以外は、お正月にならないと肉を食べられなかったと言います。
「（獲り方は）大人が教えてくれるわけではない、子ども同士で教え合い学び合った。」「ただ、その後がいけねえ。千曲をやってる（遊んでいる）と時間を忘れちゃって。」夢中で遊んでいると川に親が迎えに来て、ヘトヘトなのに桑をとりに行かされることもあったそう。みなさん懐かしそうに話してくれました。

冬の楽しみはスケート！大会でも強かった下畑

　昔は、今と比べて雪がたくさん降ったといいます。桜の木で作った手作りのソリをみんなで“貸しっこ”して、下畑城の「城坂」から滑って遊んでいました。
「なだらかな１本道があって滑り甲斐があったな。」現在は城山団地が出来て、道が曲がってしまい当時の面影はなくなってしまいました。
　冬になると、早くスケートをやりたくて田んぼの氷が張るのが待ち遠しかったとも教えてくれました。佐口湖まで下畑からは遠いので、朝４時半頃に起きて、山を歩いて登りました。南佐久郡の大会は下駄スケートの部と靴スケートの部に分かれていたそうです。昭和４０年頃の下畑はスケートが盛んで村民スケート大会では、とても成績がよかったそうです。強さの秘密は、集落内に大きな田んぼがあったこと、すぐに刃を研いでもらえる鍛冶屋が２軒あったことだといいます。
　大会では、下畑出身の国体の選手が模範滑走してくれました。
「滑る音が違う。憧れだったので、今でも忘れない。」と清人さん。冬にはスケート以外にも、親が板でスティックを作ってくれて手作りホッケーもしていたそうです。

小宮山則男さん宅
公民館建て替えの間には
演芸場になることも

木造の旧下畑橋
川の増水で崩れている

養蚕、藁作り、卓球、演芸大会盛りだくさんの分館活動

　現在公民館のある場所は以前は稚蚕飼育場で、そこでは冬になると分館活動として草履、長靴、十郎太の縄の背負いかばんを作っていました。藁打ちの機械を区で買って、縄づくりもやっていたそうです。冬休みや寒中休みは、朝から晩まで卓球をやっていて、村の分館対抗卓球大会で優勝した回数は、下畑が１番多かったと話します。
　昭和３０年代には演芸大会も行われていました。区の主催で村中の人が集まって、歌ったり、踊ったり、演劇をやったり、仮装をしたり。テレビのない時代だったからこそ、子どもも大人も大いに盛り上がりました。
「昔は、強い団結力があったけど、コロナでへえ、ダメになっちゃった。」と、忠造さん。時代とともに、少しずつ集まる機会が減ってしまったようです。

替え歌「下畑良いとこ」

　毎月２２日には、「下畑にこにこカフェ」が開かれていて、そこで「信濃の国」の替え歌を歌っているそう。

♪　*下畑良いとこ暮らしやすい*
　役場　銀行　病院に　JA　スーパーコンビニと
　歩いていけます　便利です
　にこにこカフェは２２日
　ゲームに歌にお茶会と笑顔いっぱいはじけます
　みんなで協力してこれからも
　下畑良いとこ昔から
　子ども獅子舞　天神祭　十九夜さんに盆行事
　昔の伝統引き継いで　みんなで楽しく盛り上げて
　子どもも大人もわいわいと　区民の力を引き出して
　みんなで協力してこれからも　♬

　人が少なくなっても伝統文化を残していこうとされている思い、下畑の魅力をたくさん聴かせていただきました。これからも笑顔いっぱいでお過ごしください。ご協力ありがとうございました。

聴き手　大波多　志保
　　山崎　藍子
文章　大波多　志保
編集　櫻井　麻美
　　副島　優輔
デザイン　西澤　ユキ

館・旭 と 人の暮らし

茂来館に上る坂道の手前を左折、２㎞ほど進むと館の集落が現れる。なだらかな斜面に家々が点在している。

市川紀雄（のりお）さんは館の歴史に詳しい。市川家の先祖は承安（１１７１年）の頃、武州（埼玉県）から移り住んだと言われている。

「子どもの頃の話をすると、いろいろありすぎるくらいある。道草は当たり前、山、川、丘を遊び場として飛び歩いていました。海瀬小学校に行く当時の道は林道の砂利道でした。その道を行ったり、向原に下りる道から畑ヶ中、一の淵を通って小学校に通ってました。この２つの道だけでなく、道なき道（田んぼの土手や、草っ原）を歩いたりもしました。今でも覚えているのは、学校へ行く途中で、田んぼに水をはる時期になると水路に水が流れるんです。その水路に木っ端を投げ込んで誰が一番速いか競争したもんです。季節ごとに遊びがありました。春は、先輩の上級生から『フキ採りに行かざぁ！』と誘われて採りに行って夕飯のおかずにしてもらいました。昔は、自給自足が当たり前の時代でした。」

紀雄さんの父親は馬を一頭飼っていた。農耕馬として使っていただけでなく土曳きの仕事もしたそうだ。紀雄さんの家には、馬だけでなく、鶏、兎、豚を飼っていて、その餌やりが子どもの時の仕事だったという。特に馬の世話は餌作り、堆肥出し、藁ひきまで何でもやったと紀雄さんは言う。馬好きになった紀雄さんは一つエピソードを語ってくれた。「夜中に外にあるトイレに行くと、馬が気付いて鼻をブルブル震わせて合図してくるんだ。何日も仕事が無いと、馬小屋の壁を蹴っ飛ばすんだ。『外へ連れて行け』ってね。馬具は重くてつけられないから、ふすまを入れる袋を馬の背にかけ裸馬に乗りました。同級生からはうらやましがられました。今となれば良い思い出です。」馬好きが高じて高校生の時に父親に頼んで仔馬を買ってもらった。「一週間たった時にじい様から『われ、そんなもん飼ってどうするだ』と言われ、泣く泣く返しました。」と当時を思い出すように語ってくれた。

紀雄さんの話を聞いていると、自立心が強く、チャレンジ精神が旺盛な人だとわかった。高校生の時、家で豚を飼っていたことをヒントにして、豚飼いでお金を稼ごうとしたこと。1頭６，０００円で買い、１２，０００円で売ったが、餌代が６，０００円かかったので儲けが無かったと笑いながら教えてくれた。先輩から勧められて始めたスキーでは、八千穂高原スキー場のインストラクターとして６３歳までやったこと。２５歳の時に庭木の剪定にのめり込むと何冊も剪定の書籍を買い込み勉強したこと。３０歳手前で、太陽光発電に興味を持ち始め、アメリカまで一人旅に行ったこと。「なにもやらないで、諦めるんではなく、まず実行してみる。失敗も数多くあったけれど、不思議といい人に出会い、ピンチをチャンスにしてきました。」と紀雄さんは言う。現在は、食べるものが大事だと気づき、糖度の高いプルーンと米作りに取り組んでいる。

市川紀雄さん

小林弘（ひろし）さんは旭で暮らしてきた。旭は開拓集落で、なだらかな斜面にある館の上部に開かれた集落である。満州開拓家族２０数軒が林野であった場所を開墾してできた。

「満州で苦労して帰って来て、林野だった所を開墾して開田したのだからそれは親たちは苦労したと思う。林野を切り開いて、それも手作業でやったのだから大変だった。耕作地はくじ引きで決めた。冬に始まった開田事業だから、雪混じりの土をブルドーザーで水田の形にした為、春に水をはると雪が解け陥没したり、土手が崩れたりした。お米ができるまでには何年もかかった。小４か５年生の頃、兄貴と一緒に水路の石を並べたり、牛や馬に引かせて代掻きの手伝いをした思い出があります。茂来山系から流れてくるから氷のように冷たい水の中を裸足で仕事をしました。子どもが親と同じ働きをしていた時代です。今でもよく覚えているのは、昼間は学校があるから満月の夜に兄貴と一緒に稲刈りをしました。でも嫌だと思ってやったことはありません。この地区の子どもたちはみんな家の手伝いをしてきました。」と弘さんは淡々と語ってくれた。親たちが苦労して開田した水田だったが、土が鹿沼土（かぬまつち）のように水はけがよすぎて、その分大量の水が必要だったという。農業には水が重要な役割を果たしていることから近隣の集落には大変な負担をかけてきたことを弘さんは何度もくり返し語ってくれた。

「小学校１，２年生は川久保の分教場に通ってました。アップル草間さんの前にある急坂（“でいごろ坂”と呼んでいた）を下って登校してました。上級生たちと一緒に追いかけっこしたりして楽しい登校だったことを覚えています。下校時もふきんとう、ふき、ねびるなどの山菜を採って帰った。食糧事情が悪かったので親を喜ばせた記憶がある。子どもの遊びで一番思い出に残っているのが、『牛の運動』です。仕事と遊びを兼ねて、同級生たちと一緒に２，３頭、牛の背中に乗って大日向の入り口まで行って川久保まで戻ってきて、家まで帰りました。今思えばたわいのない遊びでした。冬の遊びは田んぼリンクで遊んだ下駄スケートです。夜、スケート場の真ん中にドラム缶を置いて火をたくんです。氷の上に光が当たり、その中を滑ると自分の滑る姿が写ります。その影を見るのが好きでした。」と弘さん。

子ども心の純真さを思い出させてくれた話が焚き木拾いだ。焚き木拾いは子どもの仕事で、背負って帰ってくると、親が喜ぶ、親に褒められる。それが嬉しくてもう一度焚き木拾いに行く。みんなが寄り添って生きてきた時代のお話に心を動かされた。

小林弘・良江夫妻

市川はつ江さんは、館の生まれ。近所には男の子が多かったから、遊びはいつも一緒だったという。

「男の子も女の子も一緒に、ソリ遊び、縄跳び、ボール投げをして遊びました。抜井川は今より水量がありました。滝のように水が落ちる高い所から男の子たちは飛び込んで遊んでたので、私も飛び込んで遊んでました。そんなことが楽しかった。学校からの帰り道で覚えているのは、海瀬郵便局の近くにある木の橋で遊んだことです。男の子たちが橋の欄干から下の草むらに飛び降りる遊びをしていたのを見て、自分もやってみたくなりました。欄干から飛び降りたんですが、尾てい骨を強く打ってしまいました。本当に息ができないくらい苦しくなったんです。初めてやったんですが、今思い出してもよくやったもんだと思います。男勝りだったんですかね。冬の遊びはソリ滑りです。家の前の坂で遊びました。ソリはおじやん（祖父）が作ってくれました。男の子たちが頭を下にして滑り降りるを見て、私も同じことをして滑ってました。危なかったと思うけれど、親は何にも言わなかった。楽しく遊んでるとしか思っていなかった。昭和の人間くらいだね。こんな遊びをしてきたのは。」とはつ江さん。

「昔の人間はよく働いた。根性が違う。肉牛４頭と代掻きに使う赤牛が１頭。その世話をしたり、蚕を育てたり、お米も作ってました。どの家も同じだけれど、家の中にカイコ棚を置いて、その間に私たちが寝るという生活をしてきました。」と当時の生活を語ってくれた。子どもの頃の男勝りの性格は大人になっても変わらなかった。自動車の運転免許を取りに通った時、女性は２人だけだったそうだ。男性ばかりだったので、はつ江さんは『女のざっぺ』（女のくせにという意味）と言われたと笑いながら教えてくれた。

「私は１００歳まで生きるよ。おばさん（父親の妹）は１０４歳まで生きた。長生きの家系だから大丈夫。それに１日４，０００歩は歩くようにしている。そうするとぐっすり眠れるからね。それに私はなんでも挑戦してみることが好きなの。」とはつ江さんは大きな声で笑った。

顕空稲荷神社の神代桜

（文責　西村寛）

発行・問合せ｜ 佐久穂町役場　総合政策課　政策推進係
TEL.0267-86-2553　〒384-0697 長野県南佐久郡佐久穂町大字高野町569番地